



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2009/09/09(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 58

「一寸一言」

大阪インターハイを終えて

札幌山の手高校 上島正光

今年のインターハイ決勝戦も桜花学園高と東京成徳高の2年連続、ウインターカップ大会も含めると5大会連続の同一カードの決勝となりました。

またしても大方の予想通り、スーパースター渡嘉敷（191cm）擁する桜花学園高の同一カード5回連続勝利と、インターハイ女子初の4年連続優勝で幕を閉じる。

山の手高のインターハイでのスタートメンバーは、今野（162cm3年）、町田（161cm2年）のガード、高田（170cm2年）、本川（174cm2年）のフォワード、センター長岡（178cm1年）の布陣で臨むことになっておりました。

勝ち抜いた時に予想される対戦相手は、1回戦の滋賀短大付属高も含めて、土浦日大高、中村学園女子高、桜花学園高、金沢総合高、東京成徳高の全てのチームが180cmを超すセンタープレーヤーを擁しており、

1. 何時のことながらポストのディフェンスが第1の課題に上げられるので、ペイントゾーンでの長身者には、ダブルチーム後のミスマッチを回避するため、アウトサイドプレーヤー3人によるダブルチームとする。

2. 次にガード陣がミスマチを付かれることが予想されるので、ヘルプディフェンスの対応。
3. センター長岡が1年のため、ディフェンス、リバウンド、得点と多くのことを望めず、また彼女にはペイントエリア内に於けるステーションナリポストでは通用しないので、アウトサイドから、パス、スクリーン後のカットティングからムービングポストを狙う。ボールがフィードされない時は直ちにポストアウトして、アウトサイドプレーヤーと、ピックスクリーンもしくはアウトサイドポストを展開する。
4. さらに、ペイントエリアでの得点には制約があるので、今年のチームは早いパス回しからの3ポイントシュートか、ドリブルペネトレーションからのドリフト、キックアウトによる3ポイントシュートによる得点を主体に、アウトサイドでの得点比率を高くすることが、大会前の大きな課題。そのためアウトサイドシューターに対して3ポイントシュートのプレーメイクの意識付けとシュート確立を高める練習を実施。
5. 身長では、どのチームにも劣るのでランニングバスケットを目指しており、そのためディフェンス面での①ハーフコートのマンツーマンディフェンス②2・1・2ゾーンと③1・1・3のラインゾーンディフェンス④フルコートランジャンプ、ダブルチーム、ヘッジトラップ、スチールトラップ、バックチップを用いたマンツーマントラップディフェンスを用意。
6. トランジションゲームを展開するため、ポストフライ、インゴールブレイク、アーリーオフenseのファーストブレイクの徹底と、勝つための重要な要素であるニュートラルボールの支配、リバウンドボール、ルーズボールの1プレー面での勝利を課題として取り組む。

下級生主体のメンバー構成で、試合展開が膠着状態の時、競り合っている時などの勝敗を左右する大事な状況の対応に多少の不安はあるけれども、若いエ

エネルギーに期待をして大阪に向かいました。

私自身大阪へは試合前日に入ることになり、夜のミーティングでプレー面での確認と試合前に必ず確認をしている、審判の対応、ゲーム開始5分間はディフェンスでイニシアティブをとる、相手ディフェンスの確認、ピリオドの終わりはシュートで、相手チームの個人とチームファール数の確認等、試合時におけるチームの必要事項の共通認識と徹底をはかる。

試合経過については、

第1試合の滋賀短大付属高戦は、試合開始直後センター長岡の連続シュートと2本の3ポイントシュートで10対0と完全に自チームペースで第1ピリオドを19-9で終え、長岡が11得点と半分以上の得点で、今大会一番心配していた長岡（初の全国大会）のプレーに対する懸念が払拭できた。第2ピリオド以降は相手のゾーンディフェンス、フルコートプレスディフェンスにも対応することができ、相手チームの長身者2人（180cm、175cm）を1得点に抑え、全員出場で98-54で勝利する。

この試合で長岡が全得点の1/3以上の37得点を挙げ、2回戦以降の試合に期待を持たせてくれることとなる。

2回戦は前年度インターハイにて3位の実績を収めた土浦日大高との対戦となる。

第1ピリオドは、開始早々インナーセプトから町田の連続ゴールで始まり、14-6とリードするも、その後リバウンドを幾度となく取られ逆に23-24の1点ビハインドとなる。第2ピリオドに入っても3ポイントシュートを連続5本落とすなどリズムに乗れず、このピリオド14-11とともにシュート確率が悪く、得点が伸びず辛うじて2点リードの37-35で後半戦へ。

第3ピリオドは、町田の3本の3ポイントシュートで54-43とようやく2

桁に差を広げるが、その後相手に7連続ゴールを許し4点差に詰め寄られるも、再度町田の3ポイントシュートなどで58-50とする。

第4ピリオドは、ようやくリズムの良いパス回しからシュートが決まるようになり、さらに速攻などで残り6分には9連続得点により、67-50として徐々に点差を付け最終的に89-67で3回戦へ駒を進めることとなる。

この試合では、リバウンドの悪さが目立ち、特に3回戦の中村学園女子高とは圧倒的に身長差があり、喫緊の課題となった。

この試合、なかなかリズムに乗ることができない試合展開と、1、2回戦とも得点面で調子が上がらないキャプテン今野が気がかりとなっていたが、町田のアシスト、ディフェンスと得点を詰められそうになったときの要所での得点（最高得点の29点）の大活躍で最後は22点差の勝利。

3回戦の相手は、今までに幾度となく対戦しているが、ことごとく打ち砕かれており、10年以上も前に国体の選抜チームで1度勝っているだけで、まだ1度も単独チームでは勝利を上げることができていない中村学園女子高との対戦。

相手チームとの比較の中で、キャリア、身体能力、テクニックとどれをとっても勝るものは見当たらない相手、当然インサイドでの得点は通用しない為、3ポイントシュートのウエイトを多く、ディフェンスはオールコートマンツーマントラップディフェンス、ゾーンディフェンスと状況により使用することを前日のミーティングで確認。

当日の早朝練習でボックスアウトからのリバウンド、ルーズボールの確認と、1プレーを大事に最後まで集中力を持って試合に臨めば必ず良い結果がついてくることを信じて、各自が最高のパフォーマンスを演じることを再度確認して試合に臨む。

第1ピリオド

センタージャンプからのボールを速いパス廻しから町田のペネトレートで先取点を挙げるも、その後ディフェンスが淡白で連続7得点され、大事な序盤で離されだして嫌な状況となるがセンター長岡のフリースロー4点を含む連続6得点で大きく離されることなく、残り2分以降リードされることもなく25-22で終わる。

第2ピリオド

3分間、1~2点差のリードを保ちながら膠着状態が続く。残り7分頃より3本の3ポイントシュートと長岡のポストシュートで徐々に点差を広げ前半を49-40で終わる。

第3ピリオド

前半戦の緊張の中でのゲーム展開で、なんとか9点リードしたせいなのか、モチベーションが続かなくなったからなのか、気の緩みがでてきたのか、フリースロー、ゴール下のイージーシュートミスを連発し、加えてディフェンスの甘さがでてきて、楽にシュートを決められ、徐々に点差が縮まり、残り5分に今野を投入するも、相手の流れを変えることができず、3:34ついにブレイクから得点され58-59と逆転を許す。結局3分間ノーゴールで連続10得点を与えるなど0:50には62-69となるが、終了間際に高田の3ポイントシュートで65-69と最終ピリオドに望みをつなぐ終わり方ができたのは幸いであった。このピリオド、ディフェンスが悪く16-29と失点が多すぎる。チームの柱でディフェンスの要であるキャプテン今野の調子が今ひとつだったこともあり、ベンチに置いてメンバー全員下級生でスタートしたのが相手に大量得点をもたらした。選手起用の失敗がこのような結果を招いたと反省。

第4ピリオド

第3ピリオドの反省を踏まえ、今野を最初から起用。その今野の3ポイントシュートで1点差に追いつき、プレッシャーディフェンスが機能するにつれ、長岡のインゴールブレイクからのポストフライなど3連続ブレイクで6：39には77-74に。中村学園タイムアウト。

中村学園オールコートプレスディフェンスで仕掛けてくるが、ガード陣が冷静にボールを運び2：30には本川のペネトレートシュートで88-83とする。1：30にフリースロー2本決められまたしても88-87の1点差に詰められたところで、山の手1：05にタイムアウトを取る。

アウトサイドよりスクリーンを利用して長岡のミートカット、駄目なら本川のペネトレートを指示。

本川のペネトレートシュートが決まり90-87。ここで中村学園タイムアウト残り時間0：51、中村学園3ポイントシュートを放つが決まらず、そのリバウンドを長岡がとりファールを得、再び山の手タイムアウトを取る。0：34ストーリングを指示する。エンドラインより山の手スローイン、中村学園プレスディフェンスでボールを奪いにくるがボールをキープ。ゴール下にカットしてきた長岡にパス。1対1でシュートを決め92-87とする。残り0：10中村学園のシュートミスボールをキープして試合終了。

中村学園に単独チームとして初の勝利。

このゲームの後半戦何度となくリズムが中村学園に傾きかけたが、各自がそれぞれ役割を確実に果たし、冷静にゲーム運びができた。そのなかでも、長岡の29得点とリバウンド、ガードの冷静なゲームコントロール、本川の効果的なドリブルペネトレート（21得点）と3ポイントシュートの確立12/25（52%）と全てが出来過ぎと思えるほど良い方へ噛み合った。

試合は、何が起きるか分からないということ、また経験することとなりました。

た。

準々決勝は今大会優勝候補最右翼、桜花学園高との対戦。

桜花学園高とは昨年のウインターカップで対戦しており、負けはしたが170cmのセンターで善戦しており、今回はどこまで戦えるか前日の中村学園女子高に勝利した勢いを桜花学園高にどこまで通用するのか、最高の舞台上で演技できることを楽しみたいと思っておりました。

しかしながら、内実を言うと、中村学園に勝利した後、メンバーの中に涙を流したプレーヤーがおり、その場で注意を促すということがありました。

中村学園とのゲームが決勝戦なら、それは大いに泣いてもかまわないが、あくまでも一つの通過点にすぎず、このような事態になるとは考えも及びませんでした。一部の選手とはいえ、技術だけではなく一番大事な根底となる心の隔たりを露呈したこの事態は、私の指導のあり方を考えさせられることとなりました。

このような事態に夜のミーティングでは、精神的な要素が大きなウェイトを左右するディフェンス、リバウンドボール、ルーズボールプレーなど集中力を持ってプレーすること。ディフェンスは用意してきたゾーンディフェンス、オールコートプレスディフェンスを使う。そしてオフェンス面では、渡嘉敷がいるゴール近辺でのプレーは、おのずと限界があるので、センター長岡にはポストでのプレーは無理せず、ディフェンスを引き付けてアウトサイドのプレーヤーにボールを繋げて、早いパス廻しからのドリブルペネトレーション、キックアウト、ドリフトからの3ポイントシュートを中心に、アウトサイドプレーオフェンスを組み立てることを確認。

試合当日の早朝練習も、ポストディフェンス、ボックスアウトを確認して試合に臨む。

まともに戦える相手ではないので、センタージャンプをY字型アライメント

から身長差30cmの町田を当て、他の3人でルーズボールに集中することとした。

当然相手は身長差のある今野（162cm）のところへボールを落としたが、今野はルーズボールを頑張り、そのボールを得点に結びつけ、作戦通り幸先の良いスタートを切る。直後のオフェンスで長岡のポストでのターンシュートがブロックされ、そのボールを追ってファール、さらにディフェンスでファールと2分間で立て続けにファールを取られベンチに退く。結局長岡は第4ピリオドにあげた6点のみの得点で、第1試合から37点、24点、29点、とチームのポイントゲッターとして予想以上の活躍してきた長岡の存在が、この試合の大差という結果として現れることになる。残り3:40で9-12とまだ互角には戦っていたが、フリースロー、イージーシュートミスと得点できない間に連続16点を許すこととなり9-28。

第2ピリオドも出だしからシュートが決まらず、6:30に町田の3ポイントシュートが決まるまでシュートが入らず、その間に連続ゴールされ12-34。その後3ポイントシュート4本でこのピリオド3ポイントシュートのみの得点だけに終り24-46。

第3ピリオドもゴール下シュートを支配され、25失点、山の手は17得点中15点が3ポイントシュートの得点で、39-71と32点差となる。

第4ピリオドは開始早々からプレスディフェンスが功を奏して連続6得点とようやく流れをつかむ。渡嘉敷がベンチに退いていることもあり、ポストでのシュート、ドリブルペネトレーションも可能となり、このピリオド34得点。しかしディフェンスが悪くイージーシュートを許すこととなり、20点とられ結果73-91。

前の3試合を通して、チームの要として成長、さらにこの大舞台で一層飛躍できる最高の機会となったことと思われる長岡にはプレーを制約させず、失敗

しても良いから大胆にプレーさせれば展開が変わっていたかも知れない。
チームとしての得点も73点中17本の3ポイントシュート51点と偏った得点となってしまった。

今大会を振り返ってみると、1) 得点は4試合平均88点、そのうち3ポイントシュートが第1試合から8本、10本、13本、17本と試合毎に増すことになり、また確率も中村戦52%、桜花戦39.5%と高確率で、特に町田の高確率と得点が増す。さらに長岡の得点力が平均して20点以上は計算でき、リバウンドボールと併せ得点もチーム1番で内外バランス良く得点が取れている。2) ディフェンスは平均74点の失点で今後の課題が明確となった。3) 町田がポイントガードとして冷静な判断とリバウンドボール、ルーズボール、得点とディフェンスに多少の不安もあったが、それも克服でき、チームの柱として長岡とともに大きく成長した。

只、前述したとおり一部とはいえ選手との目的意識の偏りが見えたことに関して、この教訓を生かすように一方通行ではなく、キャッチボールができるように「最大の価値」を求められるようコミュニケーションを心がける。
それには、心構えとして「3人のあいちゃん」のように高い価値観を見つけ出せる強い気持ちの有様の構築を図ることが第1の課題にしなければと思います。

「あいちゃん」とは、ゴルフ（宮里藍）、卓球（福原愛）、モーグル（上村愛子）のことで、心が深く動かされるのは、それぞれ世界を舞台に戦っている彼女達の姿勢のことで、彼女達は日本で一番になることに「最大の価値」をおいておらず、志を立てて海外に出て、それを成し遂げようとたゆまず努力する心持を備えているからで、これからも180cmを超えるプレーヤーがいない中で、どうしたら前進できるのか選手と共に大きな目標を追い求めます。